

三国時代西南夷の社会と恩信

柿 沼 陽 平

はじめに

三国時代の蜀漢は四川方面を中心とした国家で、三国中最弱であった。頂点には皇帝の劉禪がおり、その意味で蜀漢は紛いもなく「帝国」であったが、その統治は成都や漢中などの大都市周辺やその沿線上に及ぶのみで、必ずしも四川全域に届いていたわけではなかった。とくにその西南部には、西南夷とよばれる人々が住んでおり、彼らの多くは蜀漢の直接統治を逃れていた。蜀漢にとって西南夷地域は、「不毛」（『三国志』蜀書諸葛亮伝、蜀書廖立伝注等）・「左衽」（『三国志』蜀書廖立伝等）の地であり、罪人の徙遷先であるとともに⁽¹⁾、貴重な資源の地でもあった。蜀漢は西南夷と交易し⁽²⁾、そうして得た資源に基づいて北伐を行なった⁽³⁾。その意味で、蜀漢史を研究する際に、西南夷の存在意義を看過することはできない（以下『三国志』の引用に際しては書名を略す）。

しかも西南夷社会は、たんなる蜀漢の戦略物資の補給地であるにとどまらない。西南夷の人びとには彼ら独自

の生活があり、彼らの生は蜀漢のたんなる付属品ではなかった。むしろ西南夷中心の地図を描いた場合、「辺境」に位置するのは蜀漢の方である。しかも西南夷の中には、もとより蜀漢との接点をもたず、独自の生活を営んでいた者もいた。また、青銅器や鉄器文化の少なくとも一部は、西南夷から巴蜀へ流入したといわれている⁽⁴⁾。とすると、西南夷社会の実態を理解するには、蜀漢と西南夷との関係を把握するだけでは足りない。むしろ西南夷―蜀漢関係史の議論をいったん保留した上で、まずは西南夷社会の自律的な構造と秩序を説明すべきであろう。

もっとも、「西南夷」は『史記』・『漢書』所見の語（『後漢書』所見の南蛮西南夷とは同義語）で、その地理的範囲は『史記』西南夷列伝にみえるが、西晉・陳寿『三国志』にはみえない。つまり「西南夷」という同一性⁽⁵⁾自体、西南夷側が築いたものではなく、不変のものでもない。中国古代の他の種族名（たとえば西羌）と同様に⁽⁵⁾、「西南夷」は内名⁽⁶⁾でなく外名⁽⁷⁾にすぎない。「西南夷」の人々は、同質の地理・環境下で単一の集団意識・習俗を共有した集団とは限らないのである。よって、ひとくちに西南夷社会の実態を理解するとはいっても、それは必ずしもひとかたまりの西南夷社会なるものを前提とする議論であってはならない。

そこで先行研究をみると、西南夷の種族構成⁽⁶⁾・習俗⁽⁷⁾・特産品や⁽⁸⁾、諸葛亮の南征の径路⁽⁹⁾、諸葛亮の用兵・統治の法⁽¹⁰⁾、西南夷近辺の交通路・交易路の位置⁽¹¹⁾、郡県等の行政区分の推移⁽¹²⁾、蜀漢による西南夷支配に関する後世の評価等に関しては⁽¹³⁾、すでに丁寧な史料収集と多くの議論が積み重ねられている。とくに近年の中国人研究者による史料収集には目をみはるものがある⁽¹⁴⁾。別稿ではこれらの先行研究をふまえつつ、文字史料を主、考古資料を傍証として、蜀漢期西南夷の社会と人々の異種混交的な生活そのものに検討を加えた。それによると『史記』西南夷列伝所見の西南夷（滇・夜郎・邛都・嵩・昆明・毋駝・白馬羌など）は、蜀漢期において、たんに中原王

朝の周縁領域であるのみならず、本来中原と根本的に異なる社会を構成し、夷独自の社会と生活を有していた。しかも彼らは同質の地理・環境下で単一の集団意識・習俗を共有した存在ではなく、むしろ生活面で異種混交的であった(図1)⁽¹⁵⁾。

ところが周知のごとく、西南夷の人々が蜀漢初期に一致団結して蜀漢に抵抗し、蜀漢の諸葛亮が後顧の憂いを絶つために南征に尽力したことも事実である。では西南夷は、多種多様な異種混交的であったにもかかわらず、一体どのように諸葛亮の南征に一定の政治的凝聚力を

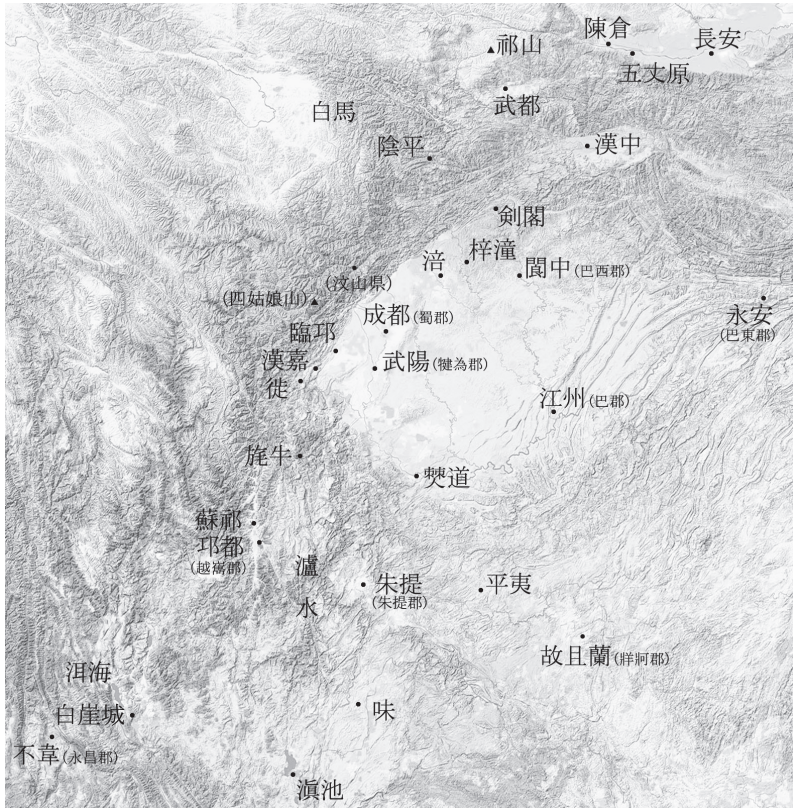


図1 三国時代蜀漢の支配領域とその地形

もって対抗したのか。また諸葛亮は彼らをどう統治しようとしたのか。本稿では、改めて史料中にみえる「骨肉」「同姓」「恩信」という概念を手がかりに、この問題に答えたい。

第一節 血縁と恩信

蜀漢期西南夷は、王・君王・君長・耆帥・耆老等のもとで集団をなし、各集団は並行関係や上下関係を構成したことが知られる。では、その際に彼らを相互に結びつけたものとは一体何だったのか。私見によれば、秦漢帝国では爵位・任侠・家族・市場等が人々のコミュニケーションを媒介したと思われるが⁽¹⁶⁾、蜀漢期西南夷社会における人間同士の紐帯もそうだったのか否か。

そこで注目すべきが『華陽国志』南中志南夷府条である⁽¹⁷⁾。

夷人の大種は昆と曰い、小種は叟と曰う。皆な曲頭木（のことき髪型）、耳環（ピアス）は鐵にして、裹結（もじりむす）（裹髻）す。大侯王無きこと、汶山・漢嘉の夷の如きなり。夷の中に桀黠（わがしこく）にして能く議を言い種人を屈服する者有らば、之を耆老と謂い、便ち主と爲る。論議するに好く物に譬喩（たと）え、之を夷經と謂う。今、南人の論を言うもの、學者と雖も亦た半ば夷經を引く。夷と姓を爲すは遼耶と曰う。諸姓は自有耶を爲す。世亂れ法を犯すも、輒ち之に依りて藏匿さる。或いは曰う、官の法とする所を爲す有らば、夷、或いは「報」仇を爲さん、と。夷と厚きに至る者は之を百世遼耶と謂い、恩は骨肉の若く、「其の逋逃の藪と爲る」。故に南人の輕々しく禍變を爲すは此を恃むなり。其の俗、巫鬼に徴し、詛盟を好み、投石・結草す。官、常に盟詛を以て之と要（むす）ぶ。

諸葛亮、乃ち夷の爲に圖譜を作る。先づ天地・日月・君長・城府を畫き、次いで神龍を畫く。龍、夷及び牛馬羊を生む。後に部主吏の乘馬・幡蓋・巡行・安卹を畫く。又た牛を牽き酒を負い、金寶を齎し之に詣るの象を畫く。以て夷に賜う。夷、甚だ之を重んじ、生口の直を致すを許す。又た瑞錦・鐵券を與う。今、皆な存す。刺史・校尉の至る毎に、齎して以て呈詣し、動もすれば亦た之の如し⁽¹⁸⁾。

本史料は「南夷」の特徴をのべたものである。そもそも「夷」は、『華陽国志』蜀志越嶲郡定笮夷条に

笮は笮夷なり。汶山を夷と曰い、南中を昆明と曰い、漢嘉・越嶲を嶲と曰い、蜀を邛と曰い、皆な夷種なり⁽¹⁹⁾とあり、數種類存在した。その中でも「南夷」は「昆明」種を中心とする南中に在住の種のことである。史料冒頭の「夷人の大種は昆と曰い、小種は叟と曰う」の「昆」とはまさに「昆明」のことであろう。

このことをふまえて全文をみると、まず「夷と姓を爲」した漢人は「遼耶」といい、夷は各々「自有耶を爲」したとある。ただしその意味は不明瞭である。よって従来は、原文を「與夷爲婚曰遼耶。諸姓婚爲自有耶」と補訂し、「夷と婚姻した漢人を遼耶、異姓の夷人と婚姻した夷人を自有耶という」の意に解するのが一般的であった⁽²⁰⁾。これに対して王繼超氏は、彝語東部方言黔西北次方言烏撒土語の音韻變化を参考に、「遼・耶」の音訳を「一・家」と推定する。そして彝族内にも異姓同士が「函野（一家人＝所謂家族）」となるための結盟儀礼（哦痴扣や阿柵柵）があり、「函野」こそが遼耶の名残であるとする⁽²¹⁾。この説によると、「遼耶＝一家＝夷と同姓となること」「自有耶＝自身の家（姓）をもっていること」となり、夷と漢は結盟によって一家（同姓）となったことになる。では、結局どのように理解すべきであろうか。通説のように原文の文字を大幅に校訂するのではなく、また異なる時代の漢語同士を無理に音通でむすぶこともなく、『華陽国志』の原文をよみとくすべはないものである

うか。もう少し解釈の飛躍の幅を同時代史料によって縮めることはできないであろうか。

そこでまず「遑耶」・「自有耶」の字義を再確認すると、「遑」字についてはよくわからない。だが王子今氏によると、「耶」は「邪」・「爺」に通じ、ほぼ三国時代以降、「父」の意に用いられた可能性が高い⁽²²⁾。この説によれば、「遑耶」はともかく、「自有耶」は「自ら父を有す（自らの父系の血統を維持する夷人）」の意に解せる。また、夷人とともに親密な関係をきずいた漢人を百世遑耶ということから推せば（後述）、遑耶がある種の漢人をさすこともまちがいない。すると遑耶とは、『華陽国志』の原文に則して読めば「夷と同姓になった漢人」、通説による校訂文に則して読めば「夷と婚姻した漢人」となる。夷と同姓になることと、夷と婚姻することは、一見ほぼ同義である。ただし王継超氏はとくに前者の訳を採用した上で、夷人と漢人が結盟によって一種の擬制的血縁関係になることを念頭においている。これより、いずれの解釈をとるにせよ、夷人が漢人との擬制的ないし血縁的な同族関係をかなり重視していた点のみは確言できる。そこで次に確認すべきは夷人の同族意識の範囲である。

そもそも本文の「姓」は、夷人の同族意識をしめすものであり、代々継承されるいわゆる姓（以下、漢姓）とは同一でない。現に、漢代の滇人・勞漫・靡莫はみな「同姓」とされるが⁽²³⁾、彼らが全員血縁者であったとは現実的に想定しにくく、むしろ伝説上の父祖を共有するといった程度の広い意味であろう。また白鳥芳郎氏は、明・李元陽編纂『万曆雲南通志』に

「蜀漢の」建興三年、時に仁果の十五世の孫の龍佑那は、能く其の民を撫し、白子國と號す。侯（諸葛武侯）は仍りて其の地を以て之を封じて姓張氏を賜う⁽²⁴⁾。

とあるのに基づき、南中における漢姓の出現を蜀漢期とする⁽²⁵⁾。当該史料は、『読史方輿紀要』卷一一三雲南一注

引『白虎通』(『白古通』の誤。『棘古通』・『白古記』・『白史』にも作り、十〜十一世紀頃成書の南詔・大理国側史料⁽²⁶⁾)に基づくと思われる。

戦國の時、楚の莊蹻、滇に據り、號して莊氏と爲る。漢の元狩の間に莊氏の後に嘗光なる者有り、白厓王と衡を争い、武帝、乃ち白人仁果を立てて滇王と爲し、而して蹻の嗣、絶つ。仁果、十五代を傳えて龍佑那當と爲る。蜀漢の建興六年(三年の誤)、諸葛武侯、南征し、師、白厓に次り、^{やど}「龍佑那當を」立てて酋長と爲し、姓張氏を賜い、遂に世々雲南に據る。或いは昆彌國と稱し、或いは白國と稱し、或いは建寧國と稱す⁽²⁷⁾。賀次君・施和金点校は「戦國の時……莊氏と爲る」を『白虎通』佚文とするが、右文の趣旨は首尾一貫しており、方国瑜『雲南史料叢刊』第二卷は右文全体を『白古記』の佚文とする⁽²⁸⁾。とすると、白鳥氏の引く『万曆雲南通志』の記載は十〜十一世紀頃の雲南人の伝承に基づくことになり、たしかにその信憑性は低くない。

加えて、南朝劉宋期の「宋故龍驤將軍護鎮蠻校尉寧州刺史邛都縣侯爨使君之碑」は、蜀姓の「爨」の出現を後漢末とする。

「爨」君、諱は龍顔、字は仕徳、建寧同樂「縣の人なり。其の先世は則ち少昊」・顓頊の玄胄にして、才子祝融の渺胤なり。……斑彪、『漢記』を刪定し、斑固は『道訓』を述脩す。爰に漢末に暨^{およ}び、邑を爨に菜^とり、因りて焉を氏族とす……⁽²⁹⁾

これは、西南夷地域における漢姓の使用が白鳥氏の想定する蜀漢期よりもさらにやや早いことを物語る。このように西南夷地域では、後漢末〜蜀漢期によりやく漢人と同様の、父子間で継承される漢姓が少しずつ登場しはじめたのである。ただしそれは、すべての夷人たちがあつという間にもちうるようになったものではない。

現に、『通典』卷一八七辺防三南蛮上白子国には、諸葛亮の南征時に佑那という酋長が漢姓を賜わったとある。

後漢の諸葛武侯南征し、白崖に次り、佑那を以て酋長と爲し、姓張氏を賜い、仍ち其の民を統せしめ、建甯甯國と號す⁽³⁰⁾。

これは前掲『說史方輿紀要』所引『白古記』と類似する史料で、佑那以外の大多数の民が実際にはまだ漢姓をもっていなかったこと、南征が漢姓拡大の一契機となったこと、南征以降も大多数の南夷は漢姓をもっていなかったことを物語る。加えて、後述するように、越犒旄牛王一族の名の一字目（漢人の姓にあたる部分）はみな異字である。これより、蜀漢期西南夷の「姓」は、やはり厳密な意味での漢姓ではなかったと考えられる。したがって、それは中原の厳格な姓とは異なり、相当曖昧な家族的紐帯であった可能性が高い。

以上、蜀漢期の南夷が、漢人との関係をきずくさいに、漢人との擬制的ないし血縁的な同族関係を相当重視していたこと、その根底にある「姓」の範疇がかなり曖昧で広いものだったことを論じた。

それでは、そのような同族意識をもつ南夷がもつとも大切にしたい人間関係とはどのようなものだったのであるか。そこで注目されるのが「骨肉」である。「骨肉」とは、その名のとおり、骨肉といえるほどに近い家族・親族の意である。また、たとえば南夷が法（文脈的にいわゆる華夏側の法）で処罰された場合、同種の南夷が「報仇」し、南夷との間で「恩は骨肉の若き関係を築いた漢人が「百世遑耶」とよばれた点にも注目される。この語は、「子孫代々」を意味する「百世」の語を冠し、たんなる「同姓」関係（遑耶）以上の親密さをしめす。これは、逆にいえば、「恩」次第では漢人でも「骨肉」と同等の「百世遑耶」になることができ、「恩」が不十分ならば、姻族だろうと何だろうと、「百世遑耶」にはなりえなかったことを物語る。その意味で、蜀漢期西南夷の社会

的紐帯を解く鍵は「姓」と「恩」にあり、とくに「骨肉」以外の者にとっては、「同姓」関係以上に、「恩」に基づく人間関係が重要であった。

では「恩」とは何か。伝世文献中にその明確かつ具体的な定義は見出しにくいものの、『説文解字』心部に

恩は、恵むなり。心と因に从う。因は亦た聲なり⁽³¹⁾。

とあり、「恩」は少なくとも相手への贈与を基本とする。前掲南中志南夷府条の「恩」は、西南夷関連史料だけでなく、周辺諸民族全般の関連史料に広くみえる「恩信」の「恩」と同義と思われる。しかも前掲『華陽国志』南中志南夷府条に「官、常に盟詛を以て之（＝南夷の意）と要ぶ^{むす}」とあるのによれば、南夷は盟詛（盟誓の意）も重視した。これは「恩信」の「信」に相当する。すなわち、『説文解字』言部には

信は、誠なり。人に従い言に従う。會意⁽³²⁾。

とあり、信とは誠の意である。白川静『説文新義』は、『春秋穀梁伝』僖公二十二年「言にして信ならずんば、何を以てか言と爲さん（言而不信、何以爲言）」の一文を引用し、言を盟誓、信を盟誓を通じて神に誓う行為とする⁽³³⁾。とすると、漢側の官吏が南夷と親しくなるには「恩」と「信」が必要であったとみられよう。この「恩信」の語は、正史の中でも『三国志』・『後漢書』に頻見し、とくに魏晉期の対外関係史で重視された魏晉期特有の概念であった。そしてそれは、次の例にみられるとおり、力によって相手を押さえつける方法（凶暴）とは区別された。

〔黄〕元は素より性、凶暴にして、他に恩信無し（蜀書温洪伝⁽³⁴⁾）。

また次の例によると、それは敵対勢力を撫順して招き寄せる手段でもあった。

（牽）招は廣く恩信を布き、降附せんとするものを招誘す（魏書牽招伝⁽³⁵⁾）。

撫するに恩信を以てす（魏書鮮卑伝⁽³⁶⁾）。

このような「恩信」を与える場合に直接的なのは、既述のとおり、賜与物を相手に「惠」み、「盟誓」によって相手との信頼関係を維持することである。また蜀書張疑伝には

〔張〕疑、牛を殺して饗宴^{もてな}し、重ねて恩信を申し、遂に鹽鐵を獲、器用周贍す⁽³⁷⁾。

ともある。それによると蜀漢の張疑は「恩信」を言葉で伝え、最終的に異民族から塩鉄の利権を得た。つまり「恩」は相手に対する有形の贈与のみならず、無形の贈与をも意味し、「信」は「盟誓」に基づく相手との約束の遵守を意味したとみられる。これに関連して呂靜氏は、「律令・法規が及ばない場合、あるいは政治的権威が必ずしもその機能を果たせない場合には、盟誓は人々の間の秩序を維持する重要な機能を果たしていた」とし、律令制の整備が進んだ中原では戦国時代以降急速に盟誓がみられなくなるとする⁽³⁸⁾。まことにその通りであろう。だからこそ、まつろわぬ民の多い西南夷では、中原とは逆に、蜀漢期になってもなお盟誓が盛行していたのである。

これより、蜀漢期西南夷は「骨肉」・「同姓」といった血縁関係と、贈与・盟誓をふまえた「恩信」による人間関係の両方を重視していたと結論づけられる。しかも、南夷との間で「恩は骨肉の若」き関係を築いた漢人は「百世遑耶」とよばれた。その語は、「子孫代々」を意味する「百世」の語を冠し、たんなる「遑耶」以上の親密さを物語る。これは、「遑耶」関係が本来、当事者二名を中心とした限定的関係であったこと、「遑耶」によって生じた親密な関係は必ずしも代々続いたわけではなかったこと、それゆえ遑耶関係の並列的な増加は必ずしも円滑な蛮漢融合を促さないことを意味する。そして華夏側の国家が南夷側と世代を超えた友好関係を結ぶには、たんに漢人官吏と南夷とが個人的に「遑耶」関係を構築する以上に、むしろ「恩信」に基づく関係を築くことが重要で

あったことをしめす。そこで次に、上記原則をふまえた上で、蜀漢期西南夷の実例をみてみよう。

第二節 諸葛亮南征期

まず蜀漢期最初の南中反乱として、劉備危篤時の漢嘉郡太守黄元の反乱が挙げられる。黄元は諸葛亮と不仲で、劉備没後に諸葛亮が権力を握るのを恐れて挙兵し、臨邛城を焼き払った。諸葛亮は劉備のいる白帝城に赴いており、成都は空同然だった。このとき成都では、黄元が越嶲郡を通過して南下し、南中を拠点とする恐れがあるとの意見も出された。だが楊洪は、黄元の性格が凶暴で、南土に対する「恩信」がないため、その可能性はないとし、実際に楊洪の言った通りとなった（蜀書楊洪伝）。これは南中を統治する上で「恩信」がいかに重要かをしめす証言の一つである。

続いて建興元年（二二三）前後に、「南中豪率（蜀書劉璋伝）」、「大姓（蜀書後主伝・呉書子闡伝・華陽国志・南中志）」、「耆率（蜀書張裔伝）」、「豪姓（呉書子匡伝）」、あるいは「益州郡之耆帥（『雲南徵備志』卷五引『記古滇記』）」等と称される雍闔と、「越嶲夷王（蜀書後主伝、『資治通鑑』魏紀二文帝黄初四年（二二三）六月条）」等と称される高定（『華陽国志』南中志に「高定元・定元」に作る）が反乱し、雍闔が反乱の「主」となった（『華陽国志』南中志）。雍闔の「恩信」は南土に行き渡り、益州郡太守正昂は殺され、その後任となった張裔は孫呉に流された（蜀書後主伝、蜀書張裔伝）。このとき一部の「益州夷」は雍闔に抵抗したが、雍闔は孟獲を派遣して説き伏せた。

「雍」閬、建寧の孟獲をして夷叟説かしめて曰く、「官、烏狗三百頭・鷹前盡く黒き蝟腦三斗・斷木の三丈を構える者三千枚を得んと欲す。汝能く得るや不や」と。夷以て然りと爲し、皆な閬に従う。斷木は堅剛なるも性は委曲、高さ二丈に至らず。故に獲以て夷を欺くなり（『華陽国志』南中志）。

かかるデマがまかり通った理由は、「益州夷」が蜀漢の官吏と直接的な接点をもたなかった点にある。つまり情報網が未発達の西南夷地域では、蜀漢の「恩信」をじかに「益州夷」に伝達するのは困難で、孟獲はそこに付け込んだのである。

その後、雍閬は「建寧（南征前の益州郡）」で「跋扈」し（蜀書李恢伝）、牂牁郡の「太守（蜀書後主伝、『資治通鑑』魏紀二文帝黃初四年六月条）」もしくは「郡丞（蜀書馬忠伝）」と称される朱褒も反乱軍に加わった。「牂牁郡丞朱提朱褒領太守恣睢（『華陽国志』南中志）」によれば、朱褒は郡丞と郡太守の両方を司っていたのであろう。後述することく、このとき昆明（永昌郡付近）にも反乱軍がいたので、反乱は益州・越嶲・牂牁・永昌の四郡に及んだことになる。反乱鎮圧後には朱褒に代わって馬忠が牂牁郡太守とされた⁽³⁹⁾。この時に「主」の雍閬が「恩信」を支えとして反乱軍を率

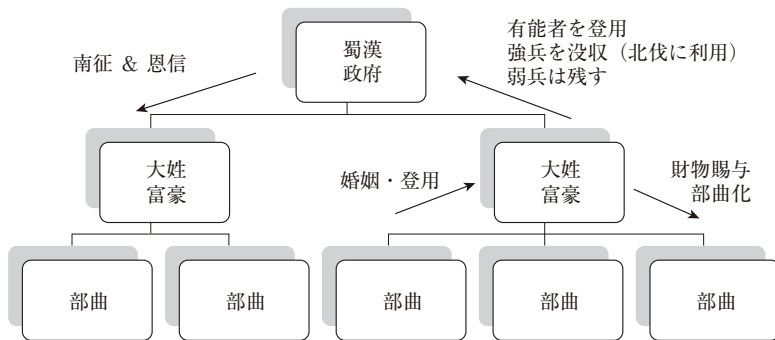


図2 諸葛亮による西南夷統治

いた点は注目に値する。

また建興三年春に諸葛亮が南征軍を興すと、西南夷では内輪もめが起こり、高定は雍闓を殺し、代わりに孟獲が反乱の「主」となった（『華陽国志』南中志）。諸葛亮の主力は五月に「瀘（瀘水）」を渡河した。五月に瀘水を渡った理由は、他の月では瀘水に瘴気が出て渡河困難だったためらしい⁽⁴⁰⁾。具体的な渡河地点は不明であるが、諸葛亮は「越嶲」を経て「建寧（南征前の益州）」に向かっている（『蜀書李恢伝』、越嶲郡以北（越嶲郡を含む）にあったのであろう⁽⁴¹⁾。その後、諸葛亮は高定を斬り、孟獲を「七たび虜にして七たび赦」した（『華陽国志』南中志）。この所謂「七擒七縱」故事と孟獲個人の实在性には賛否もあるが⁽⁴²⁾、ともかく益州・越嶲の乱はいったん鎮定された。さらに馬忠軍は牂牁郡を平定し（『華陽国志』南中志）、李恢軍は昆明で敵の包囲を破り、永昌郡の「南人」も平定された（『蜀書李恢伝』）。このとき諸葛亮の本軍が益州・越嶲を越えてどこまで進軍したかは諸説あり、味県に達したとする史料⁽⁴³⁾、滇池に達したとする史料⁽⁴⁴⁾、三絳・弄棟（現在の昆明）大理間の武定・姚安）に達したとする史料⁽⁴⁵⁾、大理盆地に達したとする史料⁽⁴⁶⁾、大理盆地には達しなかったとする史料⁽⁴⁷⁾、大理盆地の以西・以南（永昌郡を含む）に達したとする史料がある⁽⁴⁸⁾。諸葛亮が白崖に南中紀功碑を建てたとする史料や⁽⁴⁹⁾、普里部（現在の普定）を通過したとの史料もあり⁽⁵⁰⁾、後世に編纂された史料ほど、南征の範囲を広く伝える傾向がある。これと関連して雲南各地には、現在さまざまな諸葛亮伝説が残っており、その詳細・理由に関しては別途研究がある⁽⁵¹⁾。ただしともかく、蜀書や『華陽国志』をみると、馬忠・李恢は単独で牂牁郡・永昌郡を制圧しており、諸葛亮本隊がそこまで深入りしたかは疑問である。滇池へ到達したとする説は、蜀臣習禎の子孫の東晉・習鑿齒『漢晉春秋』や『華陽国志』等に基づくもので、相対的にもっとも信憑性が高いものの、それ以上は確言困難である。

なお、涼山彝族自治州西昌市出土磚に「延熙十六年」、大理以西の保山市汪官營蜀漢墓出土磚に「延熙十六年七月十日・「官吏建」⁽⁵²⁾とあり、延熙は蜀漢後主の紀年、延熙十六年は西曆二五三年である。よって、諸葛亮本人がそこまで遠征したかはともかく、蜀漢の影響力が大理以西に及んでいたことは確実である。

その後、諸葛亮は南中諸郡を平定し、次の策を採った。

南中の勁卒・青羌萬餘家を蜀に移し、五部と爲す。當たる所前無く、號して飛軍と爲す。其の羸弱なるを分かち、大姓の焦・雍・婁・爨・孟・量・毛・李に配して部曲と爲す。……夷の剛很多く、大姓・富豪に賓わざるを以て、乃ち勸めて金帛を出だし、惡夷を聘策して家の部曲と爲さしむ。多きを得たる者は奔世襲官す。是に於いて夷人、貨物を貪り、以て漸く漢に服屬し、夷漢の部曲と成る。其の俊傑建寧の爨習・朱提の孟琰及び「孟」獲を收めて官屬と爲す。習の官は領軍に至り、琰は輔漢將軍、獲は御史中丞たり。其の金銀・丹漆・耕牛・戰馬を出だして軍國の用に給す（『華陽國志』南中志⁽⁵³⁾）。

また昆明付近の「豪帥」を成都に徙し、「叟・濮」に「耕牛戰馬金銀犀革」等の「軍資」を「賦（課税）」した⁽⁵⁴⁾。つまり諸葛亮は、南中の強兵を蜀に徙した上で、「金帛」貨物を餌として、特定の「大姓」のもとに西南夷達を集めさせた。そして「大姓」と婚姻關係を結ばせ、「大姓」に残った弱兵（羸弱）を管理させた。さらに弁舌の立つ「耆老」ではなく、特定の血縁關係によつて結ばれた「大姓」を結節点とし、「大姓」の中の代表的な人物（爨習・孟琰・孟獲等）を中央官に起用した。要するに蜀漢は、一部の「大姓」と「恩信」關係を結んだ上で、「大姓」支配下の強兵を没収し、残る弱兵（羸弱）を友好的な「大姓」に委ね、彼らを通じて諸種族を間接統治したのである。これは、秦漢時代以来の所謂強幹弱枝政策に近いものであり、西南夷が重視する「恩信」と「姓」の紐帶

をも利用した、卓抜な統治策であったと思われる（図2）。

第三節 南征以降

もつとも、諸葛亮の上記統治政策も十全ではなかった。現に、高定没後の越嵩郡では叟夷が反乱し、「斯都耆帥李求承」が郡太守の龔禄・焦璜を殺した。龔禄は「當世に聲名有」る巴郡の「士人」（蜀書張疑伝）、焦璜は南中大姓の一人であったが（『華陽国志』南中志）、士人内での名声も、大姓本位の秩序も、結局は越嵩叟夷の全員を押しとどめる力にはならなかった。その一因は、諸葛亮の「恩信」が大姓に及ぶのみで、大姓から下の秩序に届かず、大姓から下の秩序が大姓任せであったためであろう。そこで張疑は、延熙二年頃（二三九年）に越嵩郡太守となるや⁽⁵⁵⁾、直接「恩信」をほどこして多くの叟族を帰順させ、延熙十七年（二五四年）まで越嵩郡を統治した。

また「蘇祁邑長冬逢」と弟の隗渠も、張疑の「恩信」で一旦は帰順した。「蘇祁」は越嵩郡の県で（蜀書張疑伝盧弼集解）、「邑長」は県級の諸侯なので、蘇祁県は邑長の冬逢が治めており、民は非漢人だったのであろう。ただし冬逢は再度背いて殺され、隗渠も西方の国境地帯で諸族を集めたが滅ぼされ、冬逢の妻は「旄牛王女（旄牛王の娘）」ゆえに解放された。このとき「恩信」が効力を失った理由はよくわからない。

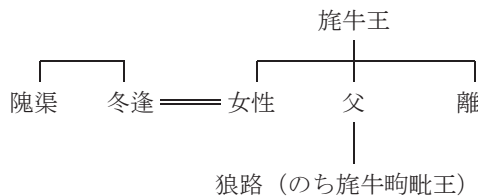


図3 蜀漢期の旄牛王の家譜

ではその後、張疑はどうやってこの状態を打開したのか。そもそも冬逢は、越嶲郡北の「漢嘉郡界旄牛夷種類四千餘戸」を率いていた狼路の「姑壻（父の姉妹の夫）」だった。冬逢の妻は「旄牛王の女」なので、狼路は旄牛王の孫にあたる。狼路はこのとき冬逢の敵を取ろうとしており、狼路と冬逢は「旄牛王の女」を介して親戚だったとみられる。狼路は、「叔父の離」に「（冬）逢の衆」を率いて形勢を窺わせており、離のちに冬逢の妻と再会した際に「姉弟歡悦」したという。つまり離は冬逢の妻の実の弟にあたる（図3）。張疑はこのような狼路・冬逢の妻・離を再会させて彼らを懐柔し、かくして狼路は降伏した。蜀書張疑伝に「旄牛、是れより輒ち患を爲さず」とあるので、狼路は旄牛王に事の次第を報告し、徼内の旄牛種を挙げて帰服したのであろう。その後、張疑は郡内を通る旄牛く成都の旧道を復旧させたという。以上の故事は次の三点を物語る。

第一に、旄牛種は旄牛王（とその大部落）を頂点とし、その下にいくつもの部落があった。そして各部落は四千戸に及ぶ場合があり、部落の長（の一部）は旄牛王の親族であった。しかも張疑は成都へ戻る際に「旄牛邑」を通過した。このとき「邑長」はわざわざ張疑を見送った。その後、張疑とともに成都へゆき、蜀漢に「朝貢」した「耆率」は百余人に及んだ⁽⁵⁶⁾。これは旄牛王のもとに邑君・邑長がいたことをしめし、周囲にも「耆率」が百余人以上いたことを意味する。このことを裏付ける史料として『後漢書』南蛮西南夷列伝には、後漢明帝期に蘇祁（あるいは蘇析）の「叟二百餘人」が越嶲郡太守張翕の葬式に牛と羊を持参したとある。「叟」には、①夷の小部落（『華陽国志』南中志）、②蜀人一般、③越嶲を中心とする西南夷の意があるが⁽⁵⁷⁾、本文では「夷人」が悲しんで「叟二百餘人」が集まったとされ、②は文脈に沿わない。③も「夷人」と「叟」を区別する本文とは合致しない。よって「叟二百餘人」は小部族長二百余人の意であらう。すると蜀漢期にも、やはり蘇祁邑長冬逢や旄牛王

の周囲には百以上の部落が存在し、邑君・邑長、もしくは耆率によって統率されたのであろう。かつて童恩正氏は、邛都・冕寧・米易・德昌・越西・喜德等の「大石墓（前漢後期以前の墓）」を調査し、各邑を貧富格差の少ない血縁的紐帯の強い氏族制社会とみたが⁽⁵⁸⁾、蜀漢期の漢嘉郡付近ではすでに旄牛王を頂点とし、邑君、耆率らを含む一大社会階層が形成されていたのである。彼らは漢姓を共有したわけではないが、互いに一定の親族意識を持ち（広義の同姓）、親族の敵を自らの敵とみなした。ただし、蜀漢側が旄牛王の一族を殺した場合、それに勝る「恩信」を与えることで、夷・漢が協力関係を締結することも可能だった。

第二に、狼路らの帰属は必ずしも旄牛種全体の帰属を意味せず、狼路らも必ずしも蜀漢側の戸籍に編入されて漢人同様に扱われたわけではない。そもそも『後漢書』南蛮西南夷列伝に

延光二年春、旄牛夷叛し、零關を攻め、長吏を殺す。益州刺史張喬、西部都尉と與に撃ちて之を破る⁽⁵⁹⁾。

とあるごとく、旄牛夷の歴史は長く、郡内を通る旄牛く成都間の旧道の遮断も百年に及んだ。張疑が当該交通路の開放を勝ち得た西暦二四〇年頃から逆算すると、旄牛夷による当該路の遮断は後漢順帝期頃に遡る。だが張疑は狼路に「貨幣」を賜い、狼路の姑（つまり冬逢の妻）からも狼路を諭させた。かくて張疑と狼路は「盟誓」を結び、旧道は開通し、「亭驛」も復活した。そこで狼路を成都の劉禪のもとへ「朝貢」させ、「旄牛眡毗王」に封じた（蜀書張疑伝）。「旄牛眡毗王」は蜀漢側の与えた王号である。工藤元男氏作成の表によれば「王」は郡級だが（表一⁽⁶⁰⁾）、狼路は数千戸を統べるの

表1 藩附の爵号と郡県・諸侯王・列侯との対比表

| 郡 | | 県 | | |
|------|-----|-----|----|----|
| 諸侯王 | | 列侯 | | |
| 四夷国王 | 率衆王 | 率衆侯 | 邑君 | 邑長 |
| | | 帰義侯 | | |

みで、非常に優遇されている。加えて、このとき旄牛種には狼路の祖父の旄牛王もいた。旄牛王は旧道開通以前からそう名乗っているので、「旄牛王」なる名称は後漢や蜀漢が与えたものではなく、自称と考えられる。狼路も本来は旄牛王の一枝にすぎず、旄牛王は蜀漢期にも朝貢していない。よって狼路服属後も、旄牛王麾下の旄牛種の多くはなお独立を保っていたと考えられる。現に、蜀漢の延熙十七年（二五四年）に張疑が成都に帰還した時、張疑に従って「朝貢」した者が「百餘人」に及んだ（蜀書張疑伝）。これは越嶲郡内に未朝貢者がなお多くいたことを裏書する。

第三に、狼路は「王」である以上、一定の自治が許されたはずである。だが、蜀漢滅亡時の譙周の上言によれば、南中七郡（越嶲・朱提・牂牁・雲南・興古・建寧・永昌）の夷には南征以来「官賦」や「兵」の供出が課せられ（蜀書譙周伝）、南中七郡より成都に近い「漢嘉郡界」の旄牛响毗王も同様の義務を負った可能性がある。すると旄牛响毗王は漢代の所謂「外臣」相当かもしれない。すなわち、栗原朋信氏によれば、漢帝国は「内」漢の皇帝の徳・礼・法が全人民に及ぶ地域と「外」漢に服属した君主だけに漢の皇帝の徳・礼・法が及び、治下では民族固有の礼・法が行なわれた地域よりなり、「外臣」は上記「外」の君主で、その治下に漢の礼と法（漢の官制・身分制度・刑法）は及ばない。そしてその外部にはさらに外客臣・朝貢国・鄰対国もあった⁽⁶¹⁾。だが、かりに旄牛响毗王が官賦や兵の供出義務を負ったとすれば、旄牛响毗王本人には蜀漢の徳・礼・法が及んだことになる。よって旄牛响毗王は所謂「外臣」相当の可能性があるのである。

他にも、何祗が汶山郡太守だった時（具体的年号不明）、「民夷」はその「信」に「服」した。何祗が転任すると「汶山夷」は「不安」となったが、何祗の「族人」が郡太守となったので落ちついた（蜀書楊洪伝注）。また既

述のとおり、王嗣も「西安圍督・汝山太守」となった際に汝山夷を「恩信」で手なづけ、王嗣が死ぬと夷は「涕泣」し、王嗣の子孫を「骨肉」や「兄弟」として扱ったという⁽⁶²⁾。そもそも人間関係はふつう代を経るごとに疎遠になるものであるが、本例は「恩信」関係が世代を超えて伝わる一例である。

以上、本節では蜀漢期西南夷が社会的紐帯としての「恩信」を非常に重視した点を確認した。それは時に「姓」の繋がりを凌駕し、「恩信」で結ばれた関係は子孫代々に及んだのである。これこそが南中で「百世遑耶」とよばれた蛮漢関係をなすものであり、蜀漢期における蛮漢融合の過程をよみとく鍵にあたるものであったと思われる。

おわりに

以上本稿では、蜀漢期西南夷社会の構造と秩序に関する前稿の検討結果をふまえ、西南夷の社会的紐帯のあり方について検討した。その結果、蜀漢期西南夷が、中原王朝の周縁領域であるばかりでなく、本来それと根本的に異なる社会であり、夷には夷の社会的紐帯があったことを論じた。それによると彼らは、王・君王・君長・耆帥・耆老等のもので集団をなし、各集団は並存関係の場合もあれば、階層関係をなす場合もあった。彼らを率いる者のうち、耆老は、必ずしも武力に優れているわけではなく、むしろ集団構成員を説き伏せる弁舌能力に秀でていた。また彼らを結束させる社会的紐帯としてもっとも重視されたのは、漢代中原人が重視した爵位・任侠・市場等に基づく人間関係ではなく、「骨肉」・「遑耶」・「恩信」であった。「骨肉」は夷の近親同士、「遑耶」・「恩信」は夷人同士もしくは夷人―漢人間の関係をしめす。中でも「恩信」は、西南夷関連史料だけでなく、周辺諸民族

一般に関する史料に幅広くみえる語で、とくに『三国志』や『後漢書』に頻見する概念であった。それは、力によって相手を押さえつける方法とは逆で、敵対勢力を撫順して招き寄せる手段でもあった。南夷―漢人間の「恩信」関係によって醸成される親密性は、当事者間一代に親密な関係性を醸成する「遑耶」関係とは異なり、時に子孫代々にまで及ぶものであった（百世遑耶）。西南夷が、さまざまな自然環境・生活様式・文化を内包する異種混交的社会で、西南夷社会全体を統括する首長を欠いていたにもかかわらず、蜀漢期に一定程度のまとまりをもつて蜀漢に背きた理由は、君長達が「骨肉」・「恩信」を活用して勢力をまとめあげた点にあった。一方、諸葛亮が多種多様な西南夷社会をまとめあげ、その後数十年に渡り一定程度大規模な反乱を抑止できた理由は、蜀漢側が西南夷の「大姓」の君長達にうまく「恩信」を施し、「大姓」を通じて「骨肉」、ひいてはその族民達を支配させたためであった。ただし、西南夷に対する実質的な統治は「大姓」まかせだったため、その後も「大姓」と族民のあいだに小規模な紛争はあった。そのため蜀漢では南征後、郡太守などが中心となって、直接西南夷に「恩信」を施し、小規模紛争に対応する体制がとられた。以上が本稿の結論である。

では蜀漢では南征以降、西南夷へ「恩信」を付与するにあたり、張疑ら郡太守以外に、特定の専門的な部署はおかれなかったのか。最後にこの点を確認すると、蜀漢官吏の「床降都督」に注目される。すなわち、そもそも蜀漢では漢中に「興勢園」という「園（防柵のある軍事拠点）」を設けて曹魏軍を防ぐとともに、汶山・龍鶴・冉駹・白馬・匡用の五地点にも「園」を設置した⁽⁶³⁾。それは西晋初期に「夷徼」を防ぐのに用いられ、蜀漢期も同様の機能を果たしたと思われる。その上で、蜀漢は「床降都督」を置き、鄧方（南郡）、李恢（建寧・前元）、張翼（犍爲武陽）、馬忠（巴西閬中）、張表（蜀郡）、閭宇（南郡）を代々の床降都督、楊戲（犍爲武陽）、楊義（犍爲）、霍

弋（南郡出身霍峻の子）をその代々の副貳とした⁽⁶⁴⁾。彼らの大半は西南夷地域出身である。石井仁氏によれば、床降都督は本来「床降屯」という塙壁を拠点とする「都督南中諸軍事」のことで、南中人に対する生殺与奪権をもつ者だった⁽⁶⁵⁾。蜀漢関連史料に「都督南中諸軍事」の語はみえないものの、他の点は首肯しうる。治所は牂柯郡南昌県（鄧方）、牂柯郡平夷県（李恢、馬忠）、建寧郡味県（馬忠、蜀漢滅亡時）であった。そしてこれらの治所は、じつはすべて当時の西南夷地域最大の幹線上に位置する⁽⁶⁶⁾。つまり西南夷は、蜀漢に抵抗もしくは服属をするにせよ、周辺地域と交易をするにせよ、基本的に当該幹線上を往来せざるを得ず、床降都督と関わらざるを得なかった。床降都督は蜀漢と西南夷を直接繋ぐ第一の窓口だったのである。これより、蜀漢が西南夷社会との関係を良好に維持する秘訣の一つは、各地の郡太守などが活躍する以外に、床降都督が西南夷に「恩信」を付与できるか否かにもかかっていたと推測される。

(1) 久村因「前漢の遷蜀刑に就いて——古代自由刑の一側面の考察——」（『東洋学報』第三七卷第二号、一九五四年）によると、前漢諸侯王の主たる徙遷先は巴蜀地域だったが、後漢時代の徙遷先は、漢中が都洛陽と近く、南方が非健康地なため、丹陽方面に移された（漢中が洛陽と近いので徙遷地に適さないとの点は、前漢の首都長安が洛陽以上に漢中と近いので疑問）。だが劉備の皇帝即位以降、蜀漢では西南夷地が主たる徙遷先となった（梓潼郡に徙された李嚴以外、廖立は汶山郡、楊儀は漢嘉郡、常房四弟は越嶲郡へ徙された）。なお秦漢律には「遷」刑がみえ、あまり重い刑罰ではない。「遷」刑に関しては工藤元男「秦の遷刑覚書」（『日本秦漢史学会会報』第六号、二〇〇五年）、水間大輔「秦律・漢律の刑罰制度」（『秦漢刑法研究』

- 知泉書館、二〇〇七年)、辻正博「流刑の淵源と理念」(『唐宋時代刑罰制度の研究』京都大学学術出版会、二〇一〇年)等参照。ただし蜀漢期の政治的理由による徙還例は「遷」でなく「徙」と表現されており、厳密には両者別物の可能性もある。
- (2) 余鵬飛『三国經濟發展探索』(湖北人民出版社、二〇〇九年)等。
- (3) 拙稿「蜀漢的軍事最優先型經濟体系」(『史學月刊』二〇一二年第九期)等。
- (4) 宋治民「川西和滇西北的石棺葬」(『考古与文物』一九八七年第三期)。
- (5) Wang Ming-Ke. 1992. *The Chiang of Ancient China through the Han Dynasty: Ecological Frontiers and Ethnic Boundaries*. Ph.D. Diss. Cambridge, MA: Harvard-Yenching Institute.
- (6) 林謙一郎「大理国史研究の視角——中原史料の分析から——」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』第五〇号、二〇〇四年)等に学説史整理がある。
- (7) 方国瑜「漢晉時期西南地区的部族郡県及經濟文化」(『方国瑜文集』第一輯、雲南教育出版社、二〇〇一年)等。
- (8) 前嶋信次「雲南の塩井と西南夷(上)(下)」(『歴史と地理』第二八卷第五・六号、一九三二年)等。
- (9) 方国瑜「諸葛亮南征的路線考説」(『方国瑜文集』第一輯、雲南教育出版社、二〇〇一年)等。
- (10) 張恩思「諸葛亮在「南中」的用兵及統治政策」(『西北大学学报(人文科学)』一九五七年第三期)、黎虎「蜀漢「南中」政策二三事」(『魏晉南北朝史論』学苑出版社、一九九九年「一九八四年初出」)等。
- (11) 藤澤義美「ビルマ雲南ルートと東西文化の交流」(『岩手史学研究』第二五号、一九五七年)、林超民「漢晉雲南各族地区交通概論」(『西南民族歴史研究集刊』第七号、一九八六年)、嚴耕望『唐代交通圖考』第四卷山劍滇黔区(中央研究院歷史語言研究所、一九八六年)、林謙一郎「中国」と「東南アジア」のはざま——雲南における初期国家形成」(『岩波講座東南

アジア史』第一巻、岩波書店、二〇〇一年）等。

(12) 久村因「古代西南支那の歴史地理研究法に關する一試論」〔『南方史研究』第一号、一九五九年）等。

(13) 柳春藩「關于諸葛亮平定「南中之乱」的評價問題」〔『史學集刊』一九五六年第一期）等。

(14) その好例として、前掲『万国瑣文集』以外に、楊帆・万揚・胡長城『雲南考古（一九七九～二〇〇九）』（雲南人民出版社、二〇一〇年）、羅開玉『四川通史卷二 秦漢三国』（四川人民出版社、二〇一〇年）、羅開玉『三国南中与諸葛亮』（四川科学技术出版社、二〇一四年）等が挙げられよう。

(15) 拙稿「三国時代西南夷の社会と生活」（工藤元男編著、二〇一五年刊行予定）。

(16) 拙著「中国古代貨幣經濟の特質とその時代的變化」〔『中国古代貨幣經濟史研究』汲古書院、二〇一一年、三五一～三六五頁）。

(17) 本史料前半の訓読については拙稿前掲注15論文参照。

(18) 夷人大種曰昆、小種曰叟。皆曲頭木、耳環鐵、裹結。無大侯王、如汶山・漢嘉夷也。夷中有桀黠能言議屈服種人者、謂之耆老、便爲主。論議好譬喻物、謂之夷經。今南人言論、雖學者亦半引夷經。與夷爲姓曰邛耶。諸姓爲自有耶。世亂犯法、輒依之藏匿。或曰、有爲官所法、夷或爲「報」執仇。與夷至厚者謂之百世邛耶、恩若骨肉、「爲其逋逃之藪」。故南人輕爲禍變恃此也。其速（俗）徵巫鬼、好詛盟、投石・結草。官常以盟詛要之。諸葛亮乃爲夷作圖譜。先畫天地・日月・君長・城府、次畫神龍。龍生夷及牛馬羊。後畫部主吏乘馬・幡蓋・巡行・安岬。又畫牽牛負酒、齎金寶詣之之象。以賜夷。夷甚重之、許致生口直。又與瑞錦・鐵券、今皆存。每刺史・校尉至、齎以呈詣。動亦如之。

笮、笮夷也。汶山曰夷、南中曰昆明、漢嘉・越嶲曰嶺、蜀曰邛、皆夷種也。

(19) 劉琳校注『華陽国志校注』（巴蜀書社、一九八四年）、任乃強校注『華陽国志校補圖注』（上海古籍出版社、一九八七年）、船

- 木勝馬・谷口房男・飯塚勝重等「華陽国志訳注稿」(『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』一九七五～一九九八年)、中林史朗『華陽国志』(明德出版社、一九九五年)等。以下各々劉琳校注、任乃強校補、船木等訳注、中林訳注と略す。胡志佳『兩晉時期西南地区与中央之關係』(台湾商務印書館、一九八八年)等。
- (21) 王繼超「遑耶」一詞的彝語含義及功用考釈」(『中央民族大学学报』(哲学社会科学版)二〇〇七年第五期)。
- (22) 王子今「走馬樓竹簡の邪の耶」稱謂使用的早期実証」(『秦漢稱謂研究』中国社会科学出版社、二〇一四年、三〇四～三一二頁)。
- (23) 『史記』西南夷列伝「滇王者、其眾數萬人、其旁東北有勞漫・靡莫、皆同姓相扶、未肯聽」。
- (24) 『蜀漢』建興三年、時仁果十五世孫龍佑那者、能撫其民、號白子國。侯(諸葛武侯)仍以其地封之賜姓張氏。
- (25) 白鳥芳郎「南詔及び大理の民族とその遺民、民家の言語系統について」(『華南文化史研究』六興出版、一九八五年、四八頁)。同書卷十六に類似的文「傳至十五世孫鳳龍佑那不變其舊。諸葛武侯收用豪傑仍封佑那於其故地、賜姓張氏」がみえる。
- (26) 藤澤義美「南詔野史の史料系統について」(鎌田博士還暦記念歴史学論叢 鎌田先生還暦記念会、一九六九年)、藤澤義美「大理盆地の前史」(『西南中国民族史の研究』大安、一九六九年)。
- (27) 戰國時、楚莊踰據滇、號爲莊氏。漢元狩間莊氏後有嘗羌者、與白厓王爭衡、武帝乃立白仁果爲滇王、而躡嗣絕。仁果傳十五代爲龍佑那當。蜀漢建興六年諸葛武侯南征、師次白厓、立爲酋長、賜姓張氏、遂世據雲南。或稱昆彌國、或稱白國、或稱建寧國。
- (28) 方国瑜『雲南史料叢刊』第二卷(雲南大学出版社、一九九八年)。
- (29) 『藝』君諱龍顏、字仕德、建寧同樂「縣人。其先世則少昊」顓頊之玄胃、才子祝融之渺胤也。……斑彪刪定『漢記』、斑固述

脩『道訓』。爰暨漢末、菜邑於爨、因氏族焉。……。

(30) 後漢諸葛武侯南征、次白崖、以佑那爲酋長、賜姓張氏、仍統其民、號建甯國。

(31) 恩、惠也。从心因。因亦聲。

(32) 信、誠也。从人从言。會意。

(33) 白川靜『白川靜著作集別卷 說文新義』(平凡社、二〇〇二～二〇〇三年)。

(34) 〔黃〕元素性凶暴、無他恩信。

(35) 〔牽〕招廣布恩信、招誘降附。

(36) 撫以恩信。

(37) (張) 疑殺牛饗宴、重申恩信、遂獲鹽鐵、器用周贍。

(38) 呂靜「中国古代の盟書遺物に関する一考察」(『東洋文化研究所紀要』第一五〇冊、二〇〇六年、一～四七頁)。

(39) 建興元年、丞相亮開府、以(馬)忠爲門下督。三年、亮入南、拜忠牂牁太守。郡丞朱褒反。叛亂之後、忠撫育卹理、甚有威

惠(馬忠伝)。建興元年夏、牂牁太守朱褒擁郡反。先是、益州郡有大姓雍闓反、流太守張裔於吳、據郡不貢、越雋夷王高定

亦背叛(後主伝)。

(40) 越雋有瀘水四時多瘴氣、三四月間發人衝之、立死。非時中人多悶絕。唯五月上伏即無害。故諸葛亮征越雋上疏曰、「五月渡

瀘、深入不毛」(『太平御覽』卷一六六州郡部十二雋州条引『十道記』)。

清・張樹『諸葛忠武侯故事』卷五引的宋・辛怡顯『至道雲南錄』に「諸葛渡瀘、乃在越雋地」。『輿地紀勝』卷一四六嘉定府

景物上石人引『蜀記』に「昔諸葛亮南征蠻中、十里刻一石人、今黎雋路尚有存者」。

(42)

孟獲と「七擒七縱」故事の實在性に關しては、兩方を是認する説と否認する説以外に、前者のみを認める方国瑜「諸葛亮南征的路線考説」(『方国瑜文集』第一輯、雲南教育出版社、二〇〇一年「一九八〇年初出」、四〇九～四一九頁)、黎虎「蜀漢南中政策二三事」(『魏晉南北朝史論』学苑出版社、一九九九年「一九八四年初出」、五〇九～五三四頁)等がある。

(43)

唐・樊綽『雲南志』卷六雲南城鎮「石城川、味縣故地也。貞觀中、爲郎州、開元初改爲南寧州。州城即諸葛亮戰處故城也」。蜀書諸葛亮伝注引『漢晉春秋』「收服孟獲、遂至滇池」、『資治通鑑』魏紀二文帝黃初六年七月条「亮遂至滇池」。

(44)

時孟獲僭爲蠻王……占據昆明・東川・武定以及烏撒・沾蒙數千里地。其衆數萬、亮經會川、歷三絳(武定也)・弄棟(姚安也)而抵水昌、斷九隆山脈以歇王氣、遂將孟獲生擒於營。使觀營壘、七縱七擒、以知亮有天成也。回兵白崖、立鐵柱以紀南

(45)

征、改益州郡曰建寧、以仁果十七世孫張龍佑領之。……隋開皇十七年二月、遣太平公史萬歲……自蜻蛉川經弄棟小勃弄・大勃弄、至於南中。……見孔明紀功碑銘、其背曰「萬歲之后、勝我者過此」(『白古演記』)。類似文は後漢諸葛武侯南征、至白

(46)

崖、殺雍闓、擒孟獲、乃封白子國王仁果十五世孫龍佑那爲酋長、賜姓張氏、於白崖築建甯城、號建甯國、立鐵柱、并「南中紀功碑」。銘其背曰「萬歲之後勝我者過此」(唐・杜佑『通典』卷第一八七邊防三南蠻上建甯國条)。

(47)

「增訂南詔野史」下卷「佛光砦」の清・胡蔚訂正「佛光砦即佛光山。山半有洞、可容萬人。又名一女關。昔諸葛武侯曾擒孟獲於此。在大理府浪穹縣東二十里」。

(48)

唐・杜佑『通典』卷一八七昆彌条「諸葛亮定南中、亦所不至」。

唐・樊綽『蠻書』卷二蘭滄江「諸葛亮征永昌、于此築城」。『永樂大典』卷三五七九引『洪武雲南志書』永昌府永平県条「諸葛村、在永昌府南十里、有村曰諸葛、環居數百家、中有諸葛祠。夷傳云在昔諸葛亮出征至此、夷人感其威德、遂祠之。至今祭祀不絕、祈禱多靈應。俗習相傳、自以爲諸葛武侯之人」、『讀史方輿紀要』卷一一八順寧府条引の明・佚名『滇紀』「孟獲

爲孔明所縱、南走慶旬、「(乾隆)清一統志」卷三八一順寧府古迹条引の明・佚名『滇紀』「孟獲南走慶旬、今城南有孟獲塞遺址」、「讀史方輿紀要」卷一一三路江条引の明・佚名『滇紀』「諸葛武侯六擒孟獲、駐兵怒江之澗」。

『隋書』史万歲伝、『白古演記』、唐・杜佑『通典』卷第一八七邊防三南蠻上建甯國条。

嘉靖『貴州図経志書』卷十一所載の周洪謨『水西安氏家伝序』に「先有慕濟濟者、與普里部仇佬氏爭爲長、迭有盛衰。其後濟濟火善撫其衆、時間諸葛武侯南征、通道積糧、以迎武侯。武侯大悦、封爲羅甸國王」。

川野明正『雲南の歴史』(白帝社、二〇一三年)、姜南『雲南諸葛亮南征伝説研究』(民族出版社、二〇一三年)等。

保山地区文物管理所「保山汪官宮蜀漢墓清理簡報」(『雲南文物』第十二期、一九八二年、四四頁)。

移南中勁卒・青羌萬餘家於蜀、爲五部。所當無前、號爲飛軍。分其羸弱、配大姓焦・雍・婁・爨・孟・量・毛・李爲部曲。

……以夷多剛恨、不賓大姓・富豪、乃勸令出金帛、聘策惡夷爲家部曲。得多者奕世襲官。於是夷人貪貨物、以漸服屬於

漢、成夷漢部曲。收其俊傑建寧爨習・朱提孟琰及「孟」獲爲官屬。習官至領軍、琰輔漢將軍、獲御史中丞。出其金銀・丹

漆・耕牛・戰馬給軍國之用。

(54) 先主薨、高定恣睢於越嶲、雍闥跋扈於建寧、朱褒反叛於牂牁。丞相亮南征、先由越嶲、而恢案道向建寧。諸縣大相糾合、圍

恢軍於昆明。時恢眾少敵倍、又未得亮聲息、給謂南人曰「官軍糧盡、欲規退還、吾中間久斥鄉里、乃今得旋、不能復北、欲

還與汝等同計謀、故以誠相告」。南人信之、故圍守怠緩。於是恢出擊、大破之、追奔逐北、南至槃江、東接牂牁、與亮聲勢

相連。南土平定……後軍還、南夷復叛、殺害守將。恢身往撲討、鋸盡惡類、徙其豪帥于成都、賦出叟・濮耕牛戰馬金銀犀革、

充繼軍資、于時費用不乏(蜀書李恢伝)。

(55) 張疑は十五年間にわたり越嶲郡に在任し、延熙十七年(二五四年)に成都へ帰還した。ここから逆算すると、張疑の越嶲郡

への着任時期は二二九年（延熙二年）となろう。

(56) 『三国志集解』蜀書張嶷伝に「其皆督率隨嶷朝貢者百餘人」、盧弼集解に「其皆督率、宋本作其督相率。朱邦衡曰、督率乃耆率之誤。蠻夷君長曰耆率、不名督也」とある。たしかに集解原文はよく読めず、盧弼集解と朱邦衡の説に従うべきであろう。

船本等訳注（四）、八〇—八二頁。

(57) 童恩正「四川西南地区大石墓族属試探——附談有關古代漢族的幾個問題」（『中国西南民族考古論文集』文物出版社、

一九九〇年「一九七八年初出」、八八—九四頁）。

(58) 延光二年春、旄牛夷叛、攻零關、殺長吏。益州刺史張喬、與西部都尉擊破之。

(59) 工藤元男「秦の領土拡大と国際秩序の形成」（『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』創文社、一九九八年、八五—一一八頁）。

(60) 栗原朋信「漢帝国と周辺諸民族」（『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館、一九七八年、一—四九頁）。

(61) 王嗣……稍遷西安園督・汶山太守、加安遠將軍。綏集羌胡、咸悉歸服、諸種素桀惡者皆來首降、嗣待以恩信、時北境得以寧靜。……（王嗣）卒。戎夷會葬、贈送數千人、號呼涕泣。嗣爲人美厚篤至、眾所愛信。嗣子及孫、羌胡見之如骨肉、或結兄弟、恩至於此（蜀書附『季漢輔臣贊』裴松之注）。

(63) 初め蜀、汶山の西五郡を以て、北のかた陰平・武都に逼り、故に險要に守を置く。汶山より龍鶴・冉駝・白馬・匡用の五圍は皆な置脩して牙門を屯す。晉初、以て夷徼を禦ぎ、因りて仍ち其の守とす（初蜀以汶山西五郡、北逼陰平・武都、故於險要置守。自汶山・龍鶴・冉駝・白馬・匡用五圍皆置脩屯牙門。晉初、以禦夷徼、因仍其守。『華陽國志』大同志晉泰始七年

（二七一）条）。

(65) (64)

詳細は羅開玉『三国南中と諸葛亮』（四川科学技術出版社、二〇一四年）等。

石井仁「呉・蜀の都督制度とその周辺」、『三国志研究』第一号、二〇〇六年、一七―三三頁）はこう解する。蜀漢の州郡都督に関する表記は一致せず、都督の公称・自称は不明瞭で、のちに「都督○○諸軍事」の官称が使用された。庾降の治所は朱提郡南昌県、牂柯郡平夷県、建寧郡味県と一定せず、庾降は地名ではない。蜀書霍弋伝は霍弋を「參軍・庾降屯副貳都督」とし、「屯」は「邨」に通じ、塢壁・壘壁・村塢等の集落・山城を意味する語なので、庾降は塢壁名であろう。『廣韻』「庾は舍なり」によれば、「庾降」降を舍る」と解せ、漢代の「受降城」と同様、南中反對勢力に帰順を促すメッセージであろう。最後の庾降都督霍弋が『華陽国志』南中志で「庾降都督」に作る一方、蜀滅亡後の晉では、霍弋は魏書卷四陳留王紀咸熙元年（二六四）九月詔で「南中都督護軍」、「晉書」卷五七陶璜伝で「南中監軍」なので、庾降都督の正式な官名は「都督南中諸軍事」であろう、と。また石井仁「地方分権化」と都督制」（『三国志研究』第四号、二〇〇九年、五〇―六九頁）は、「都督○○諸軍事」を、軍隊の指揮権でなく、処罰できる人の身分・範囲とする。

(66)

西南夷地域の主要幹線については嚴注11前掲書、林注11前掲論文等。

〔付注〕 本稿は研究報告「三国時代西南夷の社会与恩信」（中国秦漢史研究会第十四届大会暨國際學術研討会、二〇一四年八月二十三日、於中国四川成都十八歩島酒店）に基づくもので、二〇一四年度公益財団りそなアジア・オセアニア財団調査研究助成（研究課題「中国南北朝時代の貨幣経済と周辺諸地域」）による研究成果の一部である。

